

はじめに

孤独の奨め

現代宗教研究所長

今日は桜ヶ丘のベトナム料理の店でフォーと春巻を食べた。独り飯である。

原作・久住昌之氏、作画・谷口ジロー氏の「孤独のグルメ」が人気である。

輸入雑貨商の井之頭五郎が仕事で一段落した後、街で出会った食堂で独り飯を喰うのである。テレビ東京で井之頭を演じる松重豊が又好き。このドラマで独り飯もまた楽しいと感じた人も多いのではないか。

天童荒太氏の小説に『孤独の歌声』の佳作がある。一人暮らしの女性の連続殺人事件の犯人と、それを追う女性刑事に、共犯を疑われるミュージシャン志望の若者の三者三様の孤独の影が描かれている。

本文の中で天童氏は、

自分の内面の淋しさとむなしさをしっかり見つめる勇気を持っていなかった。他人と関係を作ることの重要性にあまりに無自覚すぎる。

揺るぎない絆を求めるなら、真実の相手が欲しいなら、まず自分が一人であることをとことん認識しなければならない。

と孤独を語る。

本書の解説で関口苑生氏は、

現代の孤独とは……仲間と群れ……仲間と一緒に行動することが自然であり、……一緒に群れる友達がなくなることが「孤独である」と思い込んでいる……。天童氏が重松清氏との対談「命をめぐる話」の中で、

「宮澤賢治は僕の根底に存在するんです。彼の言った「幸（さいわ）い」という言葉が僕の中には常にあって、結婚すれば幸せとか、仕事で成功したら幸せ、というような単純な幸せじゃないもの——人としての「幸い」みたいなものがどこかにあると思っています。」

死という限界を常に抱えている人間にとって、本当の幸いってなんだろうかとよく考えるんですね。（『オール讀物2010年1月号』）

※『孤独の歌声』（新潮文庫版）125頁に

ふとページが開いた賢治の童話の一部が、目に飛び込んだ。

『お前はもうだめだ。貝の火を見てごらん。きっと曇ってしまっているから』の引用が見られる。

賢治の一人菩薩の道を歩む孤独が取り挙げられている。

デイヴィット・ヴィンセントはその著『孤独の歴史』、デジタル時代の孤独の章にインターネット世界に警鐘を鳴らして、

一週間に丸一日分もテキストメッセージに費やす者たちは、互いに話す時間も能力もなくなる。シュリー・タークルの考えでは、この影響は双方向に破壊的である。オンラインで時間を過ごす、良好な人間関係を築くために必要な内面の感覚を発達させるのが阻まれ、口頭でのコミュニケーションが衰えることで、今度はより充実したアイデンティティの形成が妨げられるのである。そしてタークルの言葉を引用して、孤独であることの有用性について、孤独が自己の安定感を強化し、安定感があれば共感が生まれる。そして、他者との会話が内省のための素材をもたらす。ひとりきりのときと同じように、ともに語り合う態勢になって、より豊かな孤独にひたることを学ぶのだ。

と述べている。

数日前、久しぶりに電車に乗ると車内は割と空いていて、向かいの座席には学生が数人、OLらしき人が数人、年配の婦人が数人座っていた。何気なく眺めていたのだが、何か異様なものを見ているような感覚に襲われた。全員が俯いてスマホの画面に指を走らせている。瞬間頭を過ぎったのは、これは人間のすることではないという思いだ。

スマホは孤独を確保しつつ、コミュニケーションできる人類が獲得した最強のツール（道具）なはずなのに。

人々は、情報の波に飲み込まれ、自らを喪失し、社会の中での立位置さえ失って波間に一人漂流する。

釈尊は云われる。

世の中の遊戯や娯楽や快楽に、満足を感じることなく、心ひかれることなく、身の装飾を離れて、真実を語り、犀の角のようにただ独り歩め。（『ブツダのことは』岩波新書文庫引用）

孤独は大いなる道を開く入口ともなる。